

# 広がる堆肥入り肥料

## 散布しやすさ、成分保証で支持

**混合堆肥複合肥料** 主原料の家畜ふんの堆肥に化学肥料などを加えて成分バランスを整え、ペレットなどに造粒したもの。農水省が12年に公定規格に加え、13年から本格的に生産、販売が始まった。



混合堆肥複合肥料で栽培したハクサイの収穫調査  
(茨城県八千代町でJA常総ひかり提供)

混合堆肥複合肥料の生産量は、2013年の販売以降増え、21年は前年比11%増の9845㌧。主原料の家畜ふんの堆肥が国内で調達できる」ともあり、肥料メーカー各社の商品開発が進む。

農家にとっては、堆肥となり窒素やリン酸、カリといつた成分の含有率が保証されている点や、化学肥料を散布するプロードキャスターを使えるのが利点。同省は「堆肥

の施用を断念してきた農家が使い始めている可能性がある」(農産安全管理課)と指摘する。

化学肥料が高騰する中で製造する肥料メーカーは「同じ成分量であれば、化学肥料よりも混合堆肥複合肥料の方が安い場合も出てきた」と指摘。22年以降の生産量も伸びる可能性があると見通す。

堆肥と化学肥料を混ぜた混合堆肥複合肥料の利用が広がっている。粒状に加工されていて散布しやすく、堆肥より扱いやすい。2021年の生産量は前年比1割増。メーカーによると、その後の化学肥料高騰により、価格面の優位性も高まっている。コスト低減へ、実証を踏まえて本格利用を目指す産地も出てきた。

## コスト減実証 本格利用の産地も

ハクサイ大産地のJA常総ひかりやJA全農いばらきでは、混合堆肥複合肥料の活用で、ハクサイの肥料費を慣行栽培に比べ2割減らせるとの試験結果をまとめた。窒素量に基づく適正な施肥で、慣行栽培と同等の収量や品質を確保する。5、6月に生産者に成果を周知し、利用を促す。両者は、秀品率向上のため19年度から県結城地域農業改良普及センター、タキイ種苗と適正施肥を試験。22年度は肥料高騰を受け、低コストで形や品質の良いハクサイの栽培方法を検討した。

昨年9月下旬に定植した秋冬ハクサイでは計1・2㌶で実証。混合堆肥複合肥料は朝日アグリヤのエコレット055(保証成分は窒素10%、リン酸5%、カリ5%)を使った。成分含有率が保証されていることを生かし、植物が利用できる土中の窒素量を測定した上で、同肥料と合わせた総窒素量が10%当たり17%になるよう施肥。県の基準での施肥量は同20%だが、肥料高騰やこれまでの試験結果を踏まえ、施肥量を減らして栽培できるかを調べた。肥料費の削減率や秀品率、収量を比べ、混合堆肥複合肥料を使えば肥料費を2割減らせるとの結論を得た。

(川崎勇、小林千哲)